

# 「甲状腺クロニクル」を読んで —バセドウ病治療の歴史を学ぶ—

美唄市医師会  
市立美唄病院

## 松浦 信夫

バセドウ病は、小児でもよく診る、ありふれた病気である。治療ガイドラインも作成され、比較的予後良好な疾患と考えている。しかし、ほんの一世紀余り前、まだ、抗甲状腺薬が開発されてなく、甲状腺の生理学意義が明らかにされる前、唯一の治療法であった外科手術成績は、世界一の外科医でも死亡率40%以上で予後不良疾患の一つであったと記されている。

この本は、野口病院、隈病院、伊藤病院の我が国3大甲状腺専門病院の基礎を作り上げた、別府野口病院の初代病院長、野口雄三郎を中心に、二代目秋人、三代目志郎の三代記を、四代目野口仁志副院長が書いたものである。単なる治療の歴史だけでなく、三代にわたり、世界の一線の研究者と渡り合った甲状腺診療の歴史が記録されている。

初代野口雄三郎は、1900年、長崎第五高等医学校（後の長崎大学医学部）を卒業後、1903年、京都帝国大学福岡医学校（後の九州大学医学部）外科学教室に入局した。身長180cmの大男で、声も大きく、「大砲」とあだ名にされていた。1910年、ドイツベルリン大学に留学している。開学100周年を迎えたベルリン大学には、グレーフェ徴候の発見者のグレーフェ、病理学の大家ウィルヒョウらの研究者と共に、細菌学者のコッホ、北里柴三郎らが、以前働いていた大学である。

甲状腺学、特にバセドウ病治療の歴史は、多くの外科医が関わっていた。バセドウ病手術の予後が悪かったのは、術中・術後の大出血、並びに甲状腺ホルモンが急速に血中に放出されるための甲状腺クリーゼによるが多かった。しかし、麻酔法の改良、外科用ゴム手袋の開発による感染症の予防、止血鉗子（コッヘル鉗子）の開発により、徐々に改善してきた。1913年、雄三郎はドイツ留学から帰国後、公立若松病院院長に就任している。8年間病院長を務めた後、1922年に、我が国初めての甲状腺専門病院である、野口病院を開設した。開業の理由、なぜ別府であったのかについては、本書に詳しく書かれている。

野口病院は、全国から多くの患者を集め、バセドウ病外科治療が行われた。当時は、抗甲状腺薬もなく、また、甲状腺ホルモンの測定もできなかった。この頃から、大量のヨードを投与すると、甲状腺機能が改善することが明らかにされ、手術成績は更に改善した。その後、後輩の隈 鎮雄、伊藤 尹も入職し、

甲状腺外科を学んだ。退職後、各々甲状腺専門病院である隈病院（神戸市）、伊藤病院（東京都）を開設している。スタッフの増加と共に、雄三郎は、外国出張を重ね、外国の外科医との討論、講演、手術の供覧などを行っている。

1940年、内山秋人が入職し、後に二代目病院長野口秋人となる。この頃になると、バセドウ病のみでなく、甲状腺腫瘍も大きなテーマになっている。アイソトープ療法、MMI、PTUの開発、下垂体ホルモンの測定、視床下部ホルモンの合成など内分泌学が急速に進歩して、内分泌内科医も登場してくる。三代目病院長野口志郎以下は省略する。

たまたま私が甲状腺学の道を歩いたのは、20世紀の後半、1956年、Roitt & Doniachが甲状腺自己抗体を発見、弟子のF. Bottazo、花房俊昭らが蛍光抗体法で甲状腺抗体を組織化学的に証明し、自己免疫疾患であることを明らかにした時代である。更に、バセドウ病の病因としてMckenzieらによるLATS、LATS-protectorの発見がなされた。次いで1974年R. SmithらはTSH receptor assay法によりバセドウ病の病因がTSH受容体抗体である甲状腺刺激免疫グロブリンであることを証明した。更に、1978年、京大の小西淳二・遠藤啓吾は機能低下の重い粘液水腫（橋本病）患者に、TSH受容体刺激阻害抗体の存在をも証明した。まさに、自己免疫性甲状腺疾患の病因、病態が明らかにされた歴史的転換期であった。たまたまこの時期に診療をしていた私が、函館市で橋本病の母親から生まれた、一過性甲状腺機能低下症の兄弟例を経験し、この病因が、母親血清中のTSH受容体阻害抗体によることを、1980年にN Engl J Medに報告した。更に、バセドウ母児のTSH受容体抗体活性と児の予後をLancetに報告することができた。この業績により、3回ヨーロッパで開催された、甲状腺に関する国際シンポジウムに招待され、先に述べた人たちと親しく懇談することができた。また、コントロール不良のバセドウ病母親から出生する、全く新しい病態、一過性中枢性甲状腺機能低下症をPed Res誌に報告した。

「甲状腺クロニクル」は、野口家に伝わる歴代の資料を基に、四代目野口仁志副院長が書き上げたものである。仁志先生から寄贈され、読み始めたらすぐに引き込まれてしまい、読破した。ちょうど私が知っていた、甲状腺学の歴史の、一回り古い歴史が書かれ、如何に自分が無知であったかが思い知らされた。北海道内には甲状腺診療に携わってきた多数の先生がいます。もし本書をまだ読まれていない先生がおりましたら、ぜひ一読を勧めるために、この投稿をした次第です。

『甲状腺クロニクル 甲状腺診療とともに歩いた野口病院三代記』野口仁志 発行所（株）日本エディターズ、2019年6月23日発行。